

諸國廢城考

壬辰宛番

自十三至十四

和書門			
三六七一	二一	二四	二六
號	函	架	冊

內閣文庫	
三六七一	和書類
二一	
二四	
二六	
冊	
函	
架	

內閣文庫	
番號	和 36701
冊數	26 ( 8 )
函號	151 158



Kodak Gray Scale

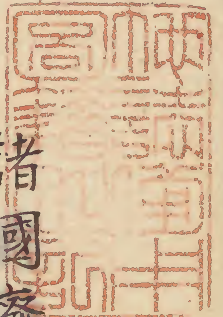
A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



© Kodak, 2007 TM: Kodak



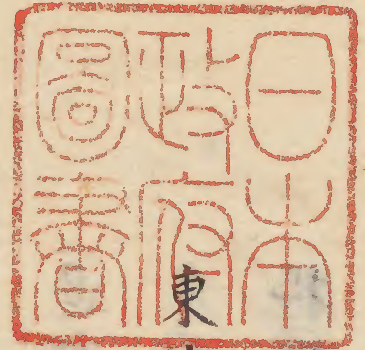




諸國廢城考卷之十三

讚岐 深井彪叔虎甫纂輯

東海道



伊豆

山木城

山木判官平兼隆此城三居ル

按山木源平盛衰記作ハ枚今從東

鑑。初兼隆ハ父和泉守信兼カ訴ニ依テ當國山

木御ニ配セラル漸ク年月ヲ經ルノ後平家一

流ノ氏族タルニ依テ相國禪閣ノ權ヲ假テ威

東海道 伊豆



ヲ郡郷ニ輝カシケレハ且以公國敵タリ且ツ  
ハ意趣ヲ挿サニシムル人間先試ニ兼隆ヲ誅  
セラルヘシトテ源頼朝兼テ京師ノ游客邦道  
ナルモノヲメ彼レカ居所ノ地形ヲ圖セシノ  
ラル邦道事ノ序ヲ求メ兼隆カ館ニ向テ數日  
逗留ノ間ニ思ノ儘ニ山川村里ニ至ルニテ悉  
ク圖メ歸ル去程ニ治承四年八月十七日ノ夜  
北條時政ヲ大將トシテ佐々木太郎定綱同次  
郎經高等ヲソ遣シケル當城ニハ折節勢コソ

無リケレヨキ者共有ケルハ當國島田宿ニテ  
遊ハシトテ十餘人出ヌ殘者共十人許ニ過サ  
ル上俄事ニテ物具着ニモ及ハス櫓ヨリ落シ矢  
ニ射ル寄手モ多ク射殺サレ手負ケレハ五六  
度ニテ引返ケリ佐々木搦手ニ廻リケルカ次  
郎經高城ノ内ニ入テ兼隆カ後見ニ權頭信遠  
ト云フ者カ頭ヲ取テ出タリ定綱兄弟命ヲ捨  
テ攻詰ニ戦ケレ氏追入追出シ牛角ノ軍ニ  
テ勝負ナシ頼朝ハ合戦ノ事ヲ想ハレ放火ノ



煙ヲ見シカ為ニ樹上ニ昇テ良久クアリケレ  
氏煙ヲ見サル人間加藤次景廉佐々木盛綱堀  
藤次親家等宿直ノ為ニ留置シニ仰テ速ニ當  
城ニ赴テ合戦ヲ遂クヘシトテ長刀ヲ取テ景  
廉ニ賜ヒケリ盛綱景廉嚴命ヲ奉ソ馳セ向ヒ  
景廉遂ニ兼隆カ首ヲソ取タリケル

### 修禪寺城

康安元年畠山入道道誓名國清。稱修理大夫。為關東執事。道誓其法號也。此城ニ據ル是ヨリ先畠山入道南方對治ノ

大将トシテ上洛セシ時東八箇國ノ大名小名  
數ヲ盡メソ上リケル此軍勢長途ニ疲レ數月  
ノ在陣ニクタヒレテ馬物具ヲ賣ル位ニ成シ  
カハ堪兼テ畠山ニ暇ヲ乞ヌ拔ニ大畧本  
國へ下リケル遙ニ程經テ畠山關東ニ下向ニ  
テ彼等カ一所懸命ノ所領共ヲ没収シテ歎ケ  
氏耳ニモ聽入ヌ適披露スル奉行アレハ大ニ  
鼻ヲツカセ追フミケル間訴人徒ニ群集シテ  
愁ヲ懷スト云者ナレ餘リテ事興盛シケレハ



宗徒ノ者共千餘人神水ヲ吞テ所詮畠山入道  
ヲ執權ニ召仕ハレハ毎事御成敗ニ從フニシ  
キ由ヲ左馬頭ヘソ基訴ケル下トシテ上ヲ退  
ル嗾訴ナレハ心中ニハ憤リケレトモ此者共  
ニ背カレナハ東國ハ一日モ無為ナルヘカラ  
ス逆。聽テ畠山カ許ヘ使ヲ立テ去々年上洛ノ  
時南方對治ノ事ハ次ニナリ專仁木左京大夫  
ヲ討ニト謀レレ候シ事隱謀ノ其一ツニテ非ヤ  
其後關東ニ下向シテ差タル罪科ナキ諸人ノ

所帶ヲ沒収セラレ候ケル事只世ヲ乱シテ基  
氏ヲ天下ノ人ニ背カセントノ企ニテ候覽。  
叛逆旁露頭ノ上ハ一日モ門下ニ跡ヲ留ラル  
ヘカラヌ退出遲々ニ及ハ速ニ討手ヲ差遣ス  
ヘシトソ云送ラレケル畠山ハ其比鎌倉ニ在  
ケルカ此上ハ陳シ申下モ叶フニシテ兄弟  
五人按スルニ尊卑分脉。國清弟曰義深稱尾張守次曰  
清義稱左近將監次曰義熙稱播磨守凡四  
人。其一人蓋式部大即從引具ノ三百餘騎當國  
輔國熙也。見テ下  
ニ落来テ此城ニソ楯籠ル去程ニ畠山入道ハ



東八箇國人拵ト戦ケルカ兵糧盡テ落方モ十  
カリケレハ皆城中ニテ討死セシト又左馬頭  
ヨリ使者ヲ以テ先非ヲ悔テ降参スヘキ由仰  
ケルヲ誠ソト思ヒ貞治元年九月道誓ハ禪僧  
ニ成テ舍弟尾張守ハ當國守護職還補ノ御教  
書ヲ賜テ降参シタリケルカ道誓ハ當國ノ府  
ニ居テ先舍弟尾張守ヲ鎌倉左馬頭ノ才ハス  
ル箱根ノ陣ヘソ参ラセケル十八日ノ夜稻生  
平次潜ニ来テ道誓ニ耳語ケルハ降参御免ノ

事ハ元来出抜ルノ事ニ候ヘハ明日討手ヲ向  
テルヘキニテ候ナル實ニモ聞ニ合セテ豊島  
因幡守俄ニ陣ヲ取易テ道ヲ差塞ク體ニ見ヘ  
テ候トソ告タリケル道誓ハ聞テ敢ス舍弟式  
部大輔ニ屹ト駒シケルカ假初ニ出ル由ニテ  
兄弟二人徒歩ニテ其夜藤澤ノ道場ニテソ落  
タリケル以上見太平記。異本、太平記云。式部大  
輔名、國憲。按、國清兄弟。尊卑分脈。載四  
人。而、不、載、國、憲、者、蓋、闕、誤、也。

三津城

示、三、津、山、入、並、道、誓、前、交、カ、後、山、新、新、



三 康安元年畠山入道道誓當城及ヒ金山修禪寺  
三ノ城ヲ構テ楯籠リタリト聞ヘケレハ左馬  
頭基氏先平一揆ノ勢三萬餘騎ヲ三萬印本太  
平記作三百  
今據諸異  
本訂之差向テル其勢已ニ當國ノ府ニ著テ  
近邊ノ庄園ニ兵糧ヲ懸人夫ヲ駈カリ立ケル程ニ  
葛山備中守ト平一揆ト所領ノ事ニ就テ劇諱  
ヲ引出シ忽ニ軍ヲセントソヒシメキケル畠  
山カ手ノ者ニ遊佐神保杉原是ヲ聞テ了ハレ  
弊ニ乘ル處ヤト思ヒケレハ五百餘騎ヲ三手

ニ分テ三月二十七日ノ夜半ニ當國府へ逆寄  
ニ外寄タリケル葛山ハ平一揆ノ者共畠山ト  
成合テ夜討ニ寄タリト騷キ平一揆ハ葛山ト  
引合テ畠山御方ヲ打ントスル物ナリト心得  
テ共ニ心ヲ置合ケレバ矢ノ一ツヲモハカハ  
カシク射出ヤス寄手三萬騎徒ニ鎌倉ヲ指テ  
引退ク左馬頭安カラス思ヒケレハ新田田中  
ヲ大將トシテ聽テ武藏相模八箇國ノ勢二十  
萬餘騎ヲソ向テレケル畠山ハ大勢ノ重テ向



ヲ由テ聞テ二城ニ火ヲ懸テ修禪寺城ニ引籠  
ル

金山城

康安元年畠山道誓當城并ニ三津城ヲ搆テ楯  
籠リケルカ左馬頭基氏八箇國ノ勢ヲ以テ差  
向ラレケレハ二城ニ火ヲ懸テ修禪寺城ヘヲ  
引籠リケル

蕪山城

北條某此城ニ居ル北條卒スルニ及テ子ナカ

リシカハ彼一門桑原平内左衛門田中内膳堀

越殿

名ハ氏滿。將軍義政弟。初名政智。稱左馬頭。後  
更左兵衛督。按畠山記富麓記九代後記小  
田原記等享德中。録倉管領成氏屢與上杉房顯  
戰。成氏師敗奔于下總。居古河城。於是上杉奉將  
軍義政弟氏滿為關東管領。居伊豆北條。是為堀越殿云。  
長氏駿河興國寺城主。按畠山ハ北條カ外戚ノ  
甥ナレハコレヲ北條ノ遺跡ニト望ミケル間

氏滿ノ下知トシテ長亨二年十月此城ニ移リ  
北條ノ跡ヲ継クサレハ伊勢ヲ改テ北條氏ト  
ソ成ケル。其後長氏家老共ヲ集テ申ケルハ債



世間ノ様ヲ見ルニ上杉兩家不和ニシテ合戦  
止ムコトナシ上杉家ノ滅亡遠カルヘカラス今  
其弊ニ乘ラントスルニ大森式部少輔剃髮號ニ  
寄栖庵  
小田原ニ在城シケレハ如何ニモ叶ヒカクシ  
然レトモ箱根山ヲ夕ニ取ナハ小田原ヲ滅ス  
ヘキコト難カラス先大森ト和睦ノ交リヲ深ク  
シ。夕バカツテ討ツヘシトテ。頃テ大森方へ使  
者ヲ立種々送物教ヲ盡シケレ凡式部少輔サ  
ノミ入魂ナカリキ。然ルニ明應三年式部少輔

卒ノ子信濃守藤頼ノ代ニ成ケレハ長氏類ニ  
親ニ通ヒケル程ニ後ニハヤハ折解テ折節ノ  
交會アリケレハ弥深クソ語ヒケル或時長氏  
小田原へ使者ヲ立申ケルハ此間當國ニテ多  
日鹿狩イタシ候ケル故ニ他山ノ鹿箱根山へ  
聚ルト見ヘ候此方ノ勢子ヲ御分國ノ方ヨリ  
入テ鹿ヲ此方へ推テ追入度旨申遣シケレハ  
信濃守許畧トハ知ラヌノ許容アリケル長氏  
犬ニ喜武勇カシコキ若モノ共ヲ数百人勝リ



テ勢子ヲシ物馴レタル手々レ者数百人犬  
引ニ作立竹鎗ヲ持セ夜討ノ支度ヲサセ石橋  
湯本ノ邊ヘカクシ置テ其相圖ヲ待居タリ時  
刻モ已ニ来リケレハ千頭ノ牛ニ角コトニ松  
明ヲ結付夜ニ入テ小田原ノ上ナル石掛山箱  
根山ヘ追カケク上テ螺ヲ吹闕ヲ作り板橋ノ  
町屋ヘ火ヲカケタリ小田原城ニハ折節軍兵  
トモ上杉合戦ノ加勢ニ行テ残ル人々少ケレ  
ハ叶ニシトテ皆散々ニ成テ落行ケル長氏遂

ニ小田原城ニ移リ居ル後長氏家督ヲ子氏綱  
ニ譲リ其身ハ隱居メ再此城ニシ居ラレケル  
永正十六年八月長氏卒ス後北條義濃守氏規  
氏康子。此城ニ居ル天正十八年小田原ノ役ニ  
氏政弟。福島左衛門大夫峰須賀阿波守長岡越中守蒲  
生飛驒守等コレヲ攻ルト云ヘ此城兵固ク拒  
テ城落ス剩城中ヨリ小笠原十郎左衛門尉横  
井越前守十八町口ニ出張メ寄手ノ陣ヲ破テ  
追討ツソレヨリ後寄手柵ヲ結ヒ遠圍ニシテ



ノ日ヲ經ケル斯ル所ニ神祖使ヲ以テ竊ニ  
氏規ヲ召ス氏規台命ニ應メ此城ヲ内藤三  
左衛門信成ニ避ケ渡メ小田原ニ来テ神祖  
ノ陣營ニ候ス豊臣秀吉則新庄新三郎石川兵  
藏ヲメ此城ヲ守ラシム是年八月神祖東遷  
ラセ給ヒ内藤信成ヲ當國ニ封メ此城ニ居ラ  
シメ一萬石ヲ食ム慶長六年信成ヲ駿河國府  
中ニ改封メ食四萬石此城廢ス按封信成於此城及  
改封並見家忠日記  
而又戴関原役守城諸將云駿河沼津城主内藤  
信成伊豆並山城主内藤信正一書所載前後齟

齟詳注于駿河沼津城下可併考

### 新條城

永祿十二年武田晴信攻テコレヲ陷ル北條氏之支城

也。城主未考。

### 湯澤城

永祿十二年武田晴信攻テコレヲ陷ル北條氏之支城

也。城主未考。

### 山中城

永祿十二年武田晴信攻テコレヲ陷ル北條氏之支城



也。城主 其後松田兵衛大夫康秀 尾張守 此城 = 未考。

居ル。天正十七年十月初。豊臣秀吉出張ノ用意

トテ。此城ヲ修テ。前ノ岱崎ヲ取入ケル。然レ瓦

康秀小勢ナレハ。大敵防カメシトテ。北條左衛

門大夫氏勝ヲ差遣ス。 按家忠日記係十八年。今從小田原記。 去程

二十八日三月。豊臣秀吉此城ヲ攻ヘシトテ。近

江中納言秀次ニ命シケレハ。中納言ノ手ノ衆。

只一時ニ攻落サント。モミニ接テ攻上ル。早玉

藥矢種モ盡シカハ。小田原ヨリノ加勢寄合勢

皆引テ上ル。秀吉岱崎ヨリ遙ノ下ノ山ニテ是

ヲ見。城ハ早自落シテ人衆退クト見ヘタリ。押

上ヨト下知シケレハ。中村式部少輔家臣ニ渡

部勘兵衛。藪内匠ト云者二人先登ス。城中ノ松

田兵衛大夫ヲ初。間宮備前守。池田氏部少輔。推

津隼人正等悉。戦死ス。氏勝モ討死ト思切。静リ

テ居タリシカ。寄手ノ兵城中へ入テ倉庫ヲ破

リ。財寶ヲ奪ヒ單テ。本城へ入ヘキトモセサリ

ケレハ。氏勝僅ニ身ヲ免レテ落去ケル。日巳ニ



暮ケレハ方角ヲ失ヒ。先途ニ迷テ自殺セシト  
シケルヲ。北條新八郎。木村三河守是ヲ制ヲ。甘  
繩城ヘソ引籠リケル。

戸倉城

北條右衛門佐氏負此城ヲ守ル。按氏負。小田原  
記作ル氏負。今據テ

諸書訂之永祿十二年今川氏實遠江掛川ヲ出テ此

城ニ移ル。後早河ニ移居ル。是號早  
河殿天正八年武

田北條不和ト成テ。互ニ國境ニ人数ヲ出シ用

心ス。駿河國ハ勝頼ノ分國ナレハ。當國境ノ城

沼津興國寺ヲ初トシテ。加勢ノ兵ヲ籠メ。小田

原勢ヲ防カントス。コレニ依テ小田原方ニモ。

當國ノ城ニ共ニ猶加勢ヲ籠ラレ。當城ニハ笠

原新六郎松田憲秀子。按六。  
家忠日記作ハ。籠リケルニ。甲州方

ヨリ様々音信ヲ遣ハシ以來ハ當國ノ守護ニ

ナシ縁者ニナスヘキ由タハカリシカハ新六

郎遂ニ甲州ヘ降参メ小田原ヘ鼓ヲナス此由

小田原ヘ聞ヘシカハ是ヲ差置テハエシキ

大事ナルヘシトテ當城ノ双ヒニ大平城ヲ構



于北條氏負ヲ籠ラレケル。勝頼則海野龍寶勝頼  
凡ノ人衆信濃海野組二百餘騎ニテ當城ヘ加  
勢アル新六郎此勢ニカヲ得テ大平城ヲ攻ケ  
レハ小田原ヨリ北條左衛門大夫氏勝ヲ差越  
ケレハ十年正月大平城ニ入り氏負ト替合テ  
アリケルカ勝頼天目山ニ敗死スルニ及テ新  
六郎降人ニ成テソ出ケル

泉頭城

大藤長門守。多目周防守等此城ヲ守ル。北條氏之支城

也

獅子濱城

大石越後守此城ヲ守ル。北條氏之支城也

大平城

天正八年笠原新六郎戸倉城ニ籠リケルカ。甲  
州ヘ降参シテ。小田原ニ敵シケル。此由小田原  
ヘ聞ヘケレハ。氏政則此城ヲ築テ。北條右衛門  
氏負ニ十餘騎ヲ添テソ籠ラレケル。九年三月

神祖遠州高天神。駿州望宗城ヲ攻落シ給ヒ



ケレハ武田勝頼大ニ驚キ何様當國境ノ城ヲ  
モ小田原ヨリ攻ラレテハ叶ハシトテ戸倉城  
ヘモ加勢ヲハ入ケル笠原此勢ニカヲ得テ此  
城ヲ攻落スヘシトテ十二月三百餘騎當城ヘ  
推寄せ戦ケル氏負度々ノ軍ニ軍兵多ク討レ  
ケレハ重テノ一戦叶カクシトテ小田原ヘ荒  
手ヲ請フ氏政則左衛門大夫氏勝ニ命シケレ  
ハ氏勝八百餘騎ニテ明ル正月小田原ヲ立テ  
當城ニ入ケル斯ル所ニ勝頼天目山ニ於テ敗

死スル由戸倉ヘ聞ベケレハ新六郎遂ニ城ヲ  
出テ降参ス

下田城

天正十八年清水上野介此城ヲ守ル。清水九代  
後記作志  
水前田利家東國ノ諸城ヲ攻テ悉クコレヲ降  
スト聞テ清水忽ニ勇力盡テ城ヲ棄テ奔ル。九  
代後記云。九鬼嘉隆以舟師攻テ  
降之。未知孰是。今從家忠日記。是年八月神祖  
此城ヲ戸田三郎右衛門尉忠次ニ賜ヒ五千石  
ヲ食ム慶長元年六月卒ス子尊次封ヲ襲テ



三居ル 尊次亦称三郎右衛門尉後更土佐守 六年尊次ヲ三河

國田原ニ改封シ 食一萬石 城遂ニ廢ス

枉戸城

天正十年七月 神祖此城ヲ修メ給ヒ 牧野右

馬允康成ニ命メコレヲ守ラシム 康成駿河興

國寺城ヨリ此城ニ移リ守ル 久野三郎左衛門

尉宗能モ亦康成ニ加テコレヲ守ル

諸國廢城考卷之十三終

諸國廢城考卷之十四

讚岐 深井彪叔虎甫 纂輯

東海道

相模

石橋城

治承四年源頼朝ハ北條佐木ヲ先卜ル三百

餘騎ヲ引具メ此城ニ楯籠ル此事角卜聞ヘク

レハ大場三郎景親其勢都合三千餘騎八月九

三日當城ニ推寄セ谷ヲ前ニ隔海ヲ後ニ當テ

東海道 相模



陣ヲ取ル日西山ニ傾キケレハ稻毛三郎重成  
進テ合戦ハ明日ヲ期スヘキヤラント申ケレ  
ハ大場申ケルハ明日ヲ相待ナラハ敵ニ大勢  
付重テ輒ク攻落カクシ道狭ノ足立悪城ナレ  
ハ小勢ニオハスル時佐殿ヲ追落セトテ三千  
餘騎聲ヲ調テ関ヲ造ル佐殿モ同関ヲ合セ源  
平互ニ入替ク終夜戦ケルカ軍兵モハヤ疲ヌ  
敵ハ大勢ナリ今ハイカニモ叶難シトテ曉方  
ニ佐殿ノ勢ハ土肥ヲ指テソ落行ケル

衣笠城

治承四年三浦大介義明此城ニ據ル畠山次郎  
重忠コレヲ攻ム初メ源頼朝ヨリ八月廿三日  
ニハ石橋ノ合戦ト兼テ觸ラレタレハ三浦参  
ヘシ連當城ヨリ鎌倉通ニ腰越稻村ハ松原大  
磯小磯ヲ過テ二日路ヲ一日ニ酒匂宿ニ着丸  
子川ノ洪水ニ渡スヲ叶ハスメ西ノハツレ木  
下ト云所ニ陣ヲ取和田小大郎ハ事ノ様ヲ見  
ントテ水ノ面ヲ見渡セハ川ノ西ノ端ニ大沼



三郎馬ヲ引ヘテ下リケルカ佐殿ノ御方ニ参  
リタリキ軍ハ既ニ散レヌト語リケレハ其夜  
ノ中ニ三浦ヘトテ帰ケリ畠山ハ五百餘騎ニ  
テ金江川ニ陣ヲ取テ待ケルカエレヲ見テ物  
具カタメテ追懸ケレハ小坪ノ坂口ニ追付夕  
リ去程ニ敵御方互ニ差詰引詰散レニ射ケル  
ニ畠山カ乗タル馬和田小次郎ニ  
名義射テレ  
テ卧ケレハ半澤成清我馬ニ乗セ降ヲ乞テ武  
藏國ヘ帰ケル義澄義盛ハ小坪軍ニ奇勝テ三

浦ヘ歸軍ノ次第ヲ語ケル義明云ケルハ敵ハ  
一定明日寄スヘシ急キ當城ニ引籠テ軍セヨ  
トテ一族悉ク此城ニ引籠ル去程ニ廿六日辰  
刻ニ盛衰記作ルサ九  
日今從東登河越太郎重頼中山次郎重  
實江戸大郎重長畠山在司次郎大將軍トシテ  
其勢三千餘騎當城ヘ發向ス義澄等カヲ奮テ  
拒キ戦ト云ヘ共昨今兩日ノ合戦ニカ疲レ矢  
盡テ見ヘケレハ義明即等共ニ云ケルハ各疲  
レ給ヘリ殿原左右ナク自害スヘカラス佐殿



尋参リテ義明カ有様ヲモ語ルヘシ君ニカラ  
付テ一味同心ニ平家ヲ亡スヘシ但吾齡已ハ  
旬餘ナレハ餘算ヲ計ルニ幾ナラス義明ヲハ  
爰ニ捨置テ身ヲ助テ急キ落ヨト云ケレ凡  
子孫名残ヲ惜ミツ、輿ヲ寄テ具シ申サント  
云ケレ凡義明終ニ乗ラヌ義澄以下父ヲハ捨  
テ泣ニ舟ニ取乗テ安房方ヘソ漕行ケル其外  
ハ三騎五騎ヌケクニ落失ケル中ニ年比ノ郎  
等共主人名残ヲ惜ミ手輿ニ乗テ出ケルヲ義

明我ハ此ニテ死スル者ナリイカニ角ハスル  
ソト云ケレ共一里許カキ行テ敵既ニ近付ケ  
レハ輿ヲステ、遁ケ終ニ江戸大郎ニソ斬ラ  
レケル 東鑿云。義明  
時年八十九。

蛭摺城

治承四年八月三浦別當義澄等石橋合戦ノ石  
ニ應メ参リケルカ軍旣ニ散シ又ト聞テ其夜  
三浦ヘトテ歸ケル所ニ畠山五百餘騎ニ  
テ金江川ニ陳ヲ取テ待ト聞畠山ハ今日一日



馬飼足休メテ身ヲシタ、メタリ我等ハ此兩  
三日アナタコナタ馳ツル程ニ馬モ弱ハリ主  
モ疲タリ馬ノ足音ハ波ニ紛レテヨモ聞エシ  
響鳴スナトテ七寸<sup>ミツハキ</sup>結テ波打際ヲ忍テホケル  
ニ和田小太郎ハイツノ習ノ間道ソ人ハ兔モ  
アレ義盛ハ名乗テ通ラントテホ過ル畠山ハ  
三浦ノ輩ニ詞懸ラレテ矢一射サルヤアル  
トテ五百餘騎ニテ追ケレハ三浦三百餘騎畠  
山ニ懸ラレテ小坪ノ峠ニホ上リ疊並ヘテ引

ヘタリ小太郎伯父ノ別當ニ向テ其ニハ東地  
ニ懸テ蛮摺ニ垣楯カキテ待給ヘカシ彼ハ究  
竟ノ小城ナリ敵左右ナク寄カタシ義盛ハ平  
ニ下テ戦ハンニ敵ヨハラハ兩方ヨリ差ハサ  
ミ中ニ取籠テ畠山ヲホシニイト安ニ若又御  
方弱ラハ義盛モ此城ニ引籠テ一所ニテ軍セ  
ント云別當然ルヘシトテ百騎ヲ分テ此城ニ  
陣ヲ取ル畠山ハ由井濱<sup>東鑑作ル</sup>稻瀬川ノ取  
陣ヲ取ル爰ニ畠山カ乳母子ニ半澤六郎成清



和田カ前ニ下塞テ云ケルハ佐殿イニ夕討レ  
給ハスト兼ル世ニ立給ハ、畠山モ定テ源氏  
ヘソ参ラルヘキ平氏世ニ立給ハ、三浦殿モ  
必御参アルヘシ是非ノ落去ヲ知ヌノ私軍其  
詮ナシトテ兩陣既ニ和平ス斯ル所ニ和田小  
次郎義茂カ許ヘ兄ノ小大郎人ヲ馳テ小坪ニ  
軍始レリ急キ馳ヨト和平以前ニ云遣タリケ  
レハ小次郎ハ大懸坂ヲ馳越テ鞭ヲ打テ急キ  
ケルカ畠山コレヲ見テ和平ハ搦手ノ廻ルヲ

待ケルナリトテ小次郎ニ向テ散々ニ蒐小次  
郎ハ主従八騎ニテ寄ツ返ツ戦ケルヲ見テ和  
田小大郎二百餘騎ニテ小次郎ヲヌナ續ケト  
テ小坪坂ヲ折下リ河ヲ隔テ引ヘタリ去程ニ  
當城ニ固タル三浦別當小坪坂ノ戦キヒシケ  
ナリツヅケトテ道ハ狭シニ騎三騎ツ、折下  
リケルカ遙ニ續テ見エケレハ畠山是ヲ見テ  
三浦ノ勢計ニハナカリケリ一定安房上総下  
総ノ勢カ一ニ成ト覺タリ大勢ニ取籠ラレト



ハユ、シキ大事イサヤ落ナントテ五騎十騎  
引ツレテ落行ケリ三浦勝ニ乗テ散ニ是ヲ  
射ル爰ニ武蔵國ノ住人綴黨ノ大将三太郎五  
郎トテ兄弟二人アリ共ニ大力ナリケルカ太  
郎和田小次郎討捕テ見参ニ入ント云捨テ近  
歩セ寄ス小次郎コレヲ見テ推並テ引組弓手  
カイナヲ踏テ頸ヲ搔落ス綴五郎兄ヲ討シテ  
喚テ蒐小次郎是ヲモ討取レハ綴小次郎父ト  
伯父トヲ討レテ大刀拔テ走懸リ小次郎カ曹

ノ鋒ヲ打ツ一打打セテ立アガリ遂ニ頸ヲハ  
取ケル畠山コレヲ見テ小次郎ニ組テ死ナシ  
トテ打寄ケレハ小次郎能引テ放ツ矢畠山カ  
乗タル馬ヲ射タリケレハ馬遂ニ倒レ畠山危  
ク見エケルニ成清主ヲ我馬ニ乗セテ武蔵國  
へ歸リケル

奴田城

治承四年八月三浦義明衣笠ノ城ニ籠リケル  
時和田義盛申ケルハ衣笠ハ馬ノ足立ヨキ所



ナレハ寄手ノ為ニハ便アリ忽ニ追落サレナ  
シ當城ハ三方ハ石山高ノ馬モ人モ通ヒ難キ  
惡所ナリ一方ハ海口ニ道ヲ一ツ聞タレハヨ  
キ者一二百人了ラハ縦敵何萬騎寄タリ共軋  
ク攻落スヘカラスト申サレヒ義明許用ナカ  
リシカハカ及ハス衣笠ニソ籠リケル

一宮城

正治二年正月梶原平三景時此城ヲ築テコレ  
ニ據ル是ヨリ先<sup>ナ</sup>千葉介常胤三浦介義澄畠山

次郎重忠已下鶴岡廻廊ニ群集メ景時ヲ向背  
スル一<sup>ニ</sup>一味ノ條<sup>ヲ</sup>變改スヘカラサルノ旨相誓  
ヒ頓テ右京進仲業<sup>ナカ</sup>訴狀ヲ衆中ニ持来テコレ  
ヲ讀上ケ各署判ヲ加フ其後件狀ヲ廣元朝臣  
ニ付ス廣元朝臣件ノ連署狀持參シケルカ即  
景時ニ下サレ是非ヲ陳スヘキノ由ヲ命セラル  
景時彼訴狀ヲ下給ルトイハ凡陳謝スルヲア  
タハス子息親類等ヲ相率テ當國ニ下向シ此  
城ヲ構テ防戦ノ用意ヲナシ人々怪ヲナス所



去ル夜丑刻ニ子息等ヲ相伴ヒ潜ニ當城ヲ遁  
出去程ニ景時謀叛ヲ企上洛スルノ由聞ヘケ  
レハサテハレヲ追罰スヘシトテ三浦兵衛  
尉比企兵衛尉糟谷藤太兵衛尉工藤小次郎已  
下ノ軍兵ヲ差遣シケル景時父子駿河國清見關  
ニ到リシ時其近隣ノ甲乙人等のヲ射シカ為  
ニ群集シケルカ退散ノ時ニ及テ景時途中ニ  
相逢フ彼輩怪テ箭ヲ射懸ケ。仍テ芦原小次郎。  
工藤八郎。三澤小次郎。飯田五郎コレヲ追フ景

時狐崎ニ返合セ戦ケルカ終ニソコニテ討レ  
ケル

### 河村城

文和元年新田武蔵守義宗左兵衛佐義興左衛  
門佐義治 按、印本、太平記無義興左衛門佐、六字。今據異本訂之。 義兵ヲ挙  
テ先手勢八百餘騎ニテ西上野ニ出ララル是  
ヲ聞テ國々ヨリ馳參ケル當家他門ノ人々都  
合十萬餘騎所ニ火ヲ懸テ武蔵國へ打越ル  
エレニ依テ武蔵上野ヨリ早馬ヲ打テ鎌倉へ



急ヲ告ケレハ仁木細川ノ人ニサテハニ、シ  
キ大事ナレ鎌倉中ノ勢千騎ニサテシト覺  
ユルナリ只先安房上總へ用セ給ヒテ御勢ヲ  
附テコソ合戦ハ候ハメト申ケレ氏尊氏ハコ  
レヲ聞カス僅ニ五百餘騎ノ勢ヲ率シ武蔵國  
へ下テ勝負ヲ決スヘシトテホ立レケル去程  
ニ閏二月武蔵野ノ小手差原ニテ一戦アリケ  
ルカ新田既ニ打負武蔵守ハ笛吹峠ノ方へソ  
落ラレケル義興義治二人ハ纒ニ二百餘騎ニ

打成レ皆馬ヨリ下居テ休ニレケルカ此勢ニ  
テハ上野へモ歸リ得ニシ落テ行ヘキ方モナ  
シホ死スヘキ命ナレハ鎌倉へホ入テ足利左  
馬頭名基氏氏達テ命ヲ失ハヤト宣ヒ夜中ニ鎌  
倉へトソ赴レケル然ルニ鎌倉ノ軍ニホ勝テ  
左馬頭ヲ追落ケレ氏將軍已ニ笛吹嶺ノ合戦  
ニホ勝テ八箇國ノ勢ヲ率シテ鎌倉へ寄給フ  
由聞ヘケレハ義興義治此城ニソ引籠リケル。  
サレ氏勢ヨク守ル下能ハスシテ翌年ノ春遂



ニ城ヲ棄テソ落行ケル

箱根城

永享十年足利持氏逆心ノ企アル由京都へ聞  
ヘケレハサラハ對治アルヘシトテ上杉兵庫  
頭ヲ大将トシ其勢十萬餘騎七月都ヲ立テソ  
推寄ケル持氏此由ヲ聞テ東八箇國ノ軍兵共  
ヲ馳催シ此城ヲ構テ待懸タル 按、足利治乱記  
云、大森伊豆守  
築城於水呑據之。以待敵兵。至。與。已。ニ京勢十萬  
此不同。未知孰是。今從結城戰場。  
餘騎當城へ推寄テ関ヲ作り攻ケレハ支守ル

一叶ハス城遂ニ陥ル

岡崎城

岡崎悪四郎義實 三浦義明弟 此城ニ居ル其後三浦  
介義同 稱陸奥守。剃髮。號。道寸。時高。養子。 當城ニ居住シテ鎌倉  
管領ノ命ニ從ヒ當國中郡ヲ領ノ威勢近邊ニ  
双ノ者ナカリキ小田原ノ北条早雲 名長氏 如何  
ニモシテ三浦ヲ攻落シ當國平均ニ治メハヤ  
ト思ケレハ永正九年八月伊豆當國ノ勢ヲ催  
シ當城へ推寄攻ケルカ義同散々ニ打破ラレ



一二人城戸モ破レシカハ一先落テ重テ兵ヲ  
催シ此鬱念ヲ遂ヘシトテ搦手ヨリ出テ住吉  
城ヘソ落行ケル

新井城

三浦介時高此城ニ居ル永享八年八月足利持  
氏武州高安寺ヘ勤座アリケル時留守警固ノ  
事先例ニ任テ時高ニ命セラル時高近年領地  
少ク軍兵モナケレハ不肖ノ身トシテ如何ニ  
モ叶ヒ難キ旨辞シ申ケレ氏嚴重ニ命セラレ

シカハ先ノ命ニ従ヒキ時高思ヒケルハ先祖  
三浦大介右大将家ニ忠有シヨリ以来代々功  
ヲ積テ御賞玩他ニ異ナリ然ルニ當家ニ至テ  
出頭人ニ覺ヲ取ラレ兼々面目ヲ失フ所無念  
ニ思ヒケルニ持氏御内々勅命ニ背キヌレハ  
京都ヨリ三浦介カ方ヘ御内書ヲ下サレケル  
ニ依テ忽ニ逆心メ當城ヘソ帰ケル去程ニ十  
年京都ヨリ討手ノ勢下ケレハ時高大將トノ  
二階堂ノ人々一味同心メ大蔵御所ヘ推寄攻



ケレハ持氏叶ハス遂ニ永安寺ニ入テ自殺シ  
ケル是ヨリ其軍功他ニ異ナレハトテ忠賞了  
リシ程ニ富貴日比ニ越タリサレトモ男子ナ  
カリシカハ其家已ニ絶ナントス是ニ依テ上  
杉修理進高<sup>ミラ</sup>救ノ子ヲ養子ニシテ義同ト名付  
テ一跡ヲ與ヘントス然ルニ時高晩年ニ及テ  
實子一人出生シケレハ聽テ義同ヲ追出ノ實  
子ニ家督ヲ與ント思フ心ソ付ケルサレハ折  
ニ觸レテ面目ナクアタリシカ後ニハ近臣ニ

義同ヲ討ツヘキ由下知シケレハ義同ハ三浦  
ヲ忍出當國西郡諏訪原惣世寺ニ引籠テ會下  
僧ノ姿ニ成ケル是ニ依テ三浦ノ一門被官皆  
時高ヲ背テ義同ヲ尋テ惣世寺ヘソ集リケル  
去程ニ義同カ勢程ナク大勢ニ成リシ上。小田  
原ノ大森式部大輔。箱根別當ナトモ皆加勢合  
カアリレカハ明應三年九月廿三日ノ夜當城  
ヘ推寄夜討ニソシケル城中ニハ思モ寄ラサ  
ルナレハ三浦介ヲ初メ一族若黨皆自害シ



テ滅ヒケル角テ義同ハ其子荒次郎義意ヲ此  
城ニ籠メ吾身ハ岡崎ニ居住シテアリケルカ  
永正九年八月北條早雲岡崎城ヲ攻落セシ間  
義同當城へ落来テ父子共ニ楯籠ル早雲聽テ  
當城へ推寄向城ヲ取テ食攻ニソセラレケル  
上杉修理大夫朝興ユレヲ聞テ三浦落去セハ  
難義ナルへシ人数ヲ出シ早雲ヲ追拂ヒ義同  
ニカヲ附ントテ當國中郡へ旗ヲ向ケラレケ  
ル朝興。小田原記。作朝貞。者非也。今據諸書訂之。早雲聽テ中郡へ推寄

入替入替攻戦ケレハ上杉勢悉ク敗北シテ江  
戸ヲ指テ打入ケル斯リシカハ矢種盡キ兵滅  
ノ近甲落去有ヌト覺ケル程ニ十三年七月城  
中ヨリ打テ出寄手ノ先陣ヲ二町許追立切ニ  
クリ枕ヲ双ヘテ討死ス按九代後記以此城陷  
及義意等戦死係十五  
年四月末知孰是  
今從小田原記。早雲ハ此城ヲ攻取テ後義同  
カ残黨ヲ召出シ横井越前守初称ニ  
神助トシヲ大将トシ  
テ小林平六左衛門等ニコレヲ守ラシム按小  
田原  
記云。早雲攻岡崎城。義同カヲ竭テ不能支退保住吉  
城。早雲進攻之亦不能守。遂奔三浦城。又云。鴻臺



役。足利義明為三浦城代。横井神助射殺。蓋此城在三浦。故亦云三浦城耳。非有二城也。

大場城

扇谷ノ上杉氏累世此城ニ居ル其先上杉三郎

重房ハモト勸修寺ノ臣ニテ宗尊親王ノ供奉

シテ鎌倉へ下リ関東ニ居住ス重房ノ子二人

アリ一人ヲ憲房ト云ヒ山内ノ祖ナリ世系出テ上野

白井城下一人ヲ重顕ト云フコレ扇谷ノ祖ナリ其

ヨリ子孫相ツイテ修理大夫定正ニ至ル亨徳

三年十二月足利成氏持氏ノ子幼名ハ永壽王。稱ニ左馬頭。永亨乱。奔信濃。匿大

井持光ノ家。後長尾昌賢迎之。立為関東主。再居鎌倉。而石憲資ノ子憲忠於伊豆使之。為管領。以助成氏。鎌倉ノ西御門ニテ管領上杉右京亮憲忠ヲ

誅ス。此父持氏。憲實ノ為ニ亡レシ。ヲ恨ニ思

ヒシ。故トソ聞エキ。去程ニ上杉ノ老臣長尾左

衛門尉剌髮。號ニ昌賢等相謀テ越後ヨリ民部大輔顯

定ヲ迎テ成氏ト合戦ニ及ヒケレハ成氏終ニ

折負下総國へソ落行ケルコレヨリ関東大ニ

乱テ三十餘年ノ間一日モ静ナラス斯リシカ

ハ京都ヨリ政知將軍義教ノ子下向有テ旗ヲ立ラレ



シ程ニ山内定顯扇谷正ノ兩管領コレヲ輔佐シ  
テ關東ノ執權トナレリ其後定正カ老臣大田  
道真并其子道灌カ謀畧ニ依テ關東ノ諸家多  
ク定正ニ屬ス然ルニ長尾四郎左衛門景春髮  
號伊三カ奢侈甚シキヲ見テ道灌コレヲ退ケシ  
テヲ請ヒシカ正許容ナクメ止メ果シテ  
景春逆心ヲ企定正ヲ背テ顯定ニ屬シケレハ  
其ヨリ定正顯定不和ニナリテ互ニ合戦止ム  
一十カリキ角テ定正ハ明應二年逝去メ其子

朝良定正兄朝昌子相續テ江戸河越兩城ヲ守  
護シ顯定ト戦ケルカ永正二年朝良顯定和睦  
メ顯定上州ニ歸ケレハ朝良ハ江戸城ニソ入  
ケルソレヨリ三世ニノ朝定ニ至テ終ニ北條  
氏康カ為ニ滅サル朝定朝興子  
乃朝良孫。

平塚城

文明十年五月大田道灌道真子名資長幼字源六郎後更備中守道灌  
其法攻テコレヲ陷ル城主未考

湯坂嶺城



大森筑前守氏頼此城ニ居ル明應中北條長氏  
攻テコレテ陷ル

實田城

明應中大森信濃守藤頼

武部少輔實頼子。為小田原城主。

北條

長氏カ為ニ攻破ラレ小田原ヲ落テ此城ニ引

籠ル

住吉城

永正七年長尾景春逆心ヲ企長尾六郎為景十  
一味シテ已ニ抄立テ沼田在陣ヲ張ル北條

早雲モ彼六郎ト一味メ此城ヲ取立出張ス上

杉建芳臣上田蔵人早雲カ下知ニ從ヒ武州神

奈川ニ出張シテ権現山ニ楯籠ル管領ハ上杉

上州白井ニ在ナカラ景春ニ取向ヒ亦神奈川

城夕ニ攻落サハ其外ハ自落スヘシトテ上杉

治部少輔建芳ヲ遣ハメ神奈川ヲ攻シムルニ

上田戦敗レテ行方知ラス落ケレハ當城モ亦

自落シテケリ九年八月北條早雲岡崎城ヲ攻

ケルニ三浦介義同散クニ抄破ラレケレハ一



先落テ重テ兵ヲ催シ此鬱念ヲ散スヘシトテ  
岡崎ヲ落テ此城ニリ籠リケル其後此城ヲモ  
落サレテ三浦ノ方ヘ落行ケル

三崎城

永正十三年七月北條早雲新井城ヲ攻落シ則

千此城ヲ築テ房州ノ敵ヲハ防ケル 城主未考。按九代後

記係十五年四月。今從小田原記。

甘繩城

北條上總介綱成 遠江高天神城主福島上總介子。初稱左衛門大夫。按介或作守。

者、非也。 永祿三年三月上杉輝虎東八箇國ノ軍兵

ヲ催シ小田原ヘ發向ス是ハ先例ニ管領ト成

テハ若宮ヘ拜賀アルトナレハ鎌倉ヘ參詣ア

ルヘシトノ事ナルカ彼所ハ小田原ヨリ程近

ケレハ北條定テ勢ヲ出メ合戦ニ及ハ、拜賀

モ叶フニシトテ先小田原對治ト披露シケル

トソ聞エシ此時當城ヲ攻ントテ推寄セケレ

氏綱成カ子左衛門大夫氏繁ヨク戦テ遂ニ降

ラス 小田原記以此以上係四年而為北條常陸、介據此城。今從九代後記。按常隆、介即左衛



門大夫氏繁也。永祿十二年綱  
其後氏繁相襲テ

成尚<sup>居レ之</sup>當九代後記<sup>為是</sup>  
コレニ居リ傳テ氏勝ニ至ル  
氏勝亦稱左衛門大夫天正

十七年豊臣秀吉小田原出張ノ聞ヘアリケレ

ハ北條氏政箱根ノ山中ニ新城ヲ取立氏勝ヲ

差遣シ其城ヲ守ラシム去程ニ十八年三月秀

吉發向シテ山中城ヲ攻落シケレハ氏勝此城

ニ引籠ルホ残サレタル家子郎等ヲ集メ此城

ヲ枕トシテ討死スヘシト一扁ニ思極テ居タ

リシニ氏直ヨリ使ヲ以テ早夕小田原へ籠城

スヘシト有ケレ氏勝面目ナクヤ思ヒケシ

只此城ニテ打死トノミ申テ終ニ小田原へ行

カス斯ル所ニ神祖日比氏勝ヲ知り給ヒシ

カハ本多忠勝カ内ニ都筑弥左衛門松下三郎

ナル者氏勝ト知人ナレハ彼兩人ヲ使トメ関

白家へ降参然ルヘシト有シカトモ何ノ恨有

テ重代ノ主恩ヲ捨只今敵ニ成ヘキト更ニ合

点ナカリキ松下カ門族ニ龍達和尚ト云禪僧

アリ氏勝カ墓所ノ寺ニ住居シケレハ彼僧ト



相謀テ様々ニ取繕ヒ申ケレハ氏勝遂ニ降人  
ト成テソ出ケル秀吉則コレヲ封ヲ賜フテ故  
人如シ

足柄城

永祿十二年武田晴信攻テコレヲ陷ル。北條氏之支城也。城主未考。天正十八年小田原ノ役ニ依田大膳此城ヲ守ル。四月神祖進テコレヲ攻ム。大膳支ルヲアタハス。城ヲ棄テ奔ル。

深澤城

永祿十二年北條常陸守初祿左衛門大夫其繩城主上総介綱成子。此城ニ楯籠リケルカ武田晴信攻テコレヲ陷ル。駒井右京ヲ置テ此城ヲ守ラシム。元龜元年四月北條氏康父子兵ニ將トメ此城ヲ攻メシカト落チス。遂ニ兵ヲ引テ還ル。

綱代城

天正中里見左馬頭義朝此城ヲ攻ム。城主未考。

筑井城

天正十八年豊臣秀吉諸將ヲ遣ハメコレヲ攻







